

越境する日本思想史——思想と文学の垣根越え——

小島 康敬

イソップの寓話に卑怯なコウモリの話がある。コウモリは形勢に応じて、鳥のような翼をもっているからと言っては鳥の仲間になったり、鼠のような毛皮と牙をもっているからと言っては獣の仲間になったりする。結果、どちらからも嫌われて仲間はずれにされてしまう。譬喩は適切ではないかも知れないが、このコウモリのように日本思想史学は帰属先がはっきりしない、曖昧な立ち位置にあったように思われる。少なくとも私の場合は、自分の研究方法において、純然たる哲学のそれでもないし、かといって歴史学のそれとも言えず、何か腰の落ち着かない、不安定感を抱いてきた。そういった感じを私に限らず、日本思想史を専門と名乗る人は少なからず抱いてきたのではないであろうか。

今、日本思想史を専門とすると行ったが、もともと日本思想史という確固たる専門領域があったのであろうか。それは哲学、倫理学、文学、歴史学、政治学といった既存の学問領域からはみ出た人達の寄り合い場所として成立してきたと言ったら、言い過ぎであろうか。

それでも日本思想史学会は今年で設立から四五年を迎え、会員も六百名以上を数えるようになった。日本思想史に関する研究も着実に進展し、昨年からペリカン社で『日本思想講座』全五巻の、そして今年から岩波書

店で『日本の思想』全九巻の刊行が続いている。ようやく日本思想史学という学問領域が学界の中で市民権を得てきたかに見える。更に近年では諸分野からのいわば刺激的な「挑戦状」も送られるようになってきた。

これは確かに斯界にとって慶賀すべきことである。しかし他方、専門研究の発展・深化に伴い、日本思想史学それ自体のタコツボ化も進行しているかに見える。日本思想史学の本来の強みは領域横断的な機動力と、良くも悪しくアマチュア精神とにあったのではなからうか。

以上のような状況を鑑みて、今年度の大会テーマを「越境する日本思想史——思想と文学の垣根越え」と設定した。「越境する日本思想史」という表現には二つの思いがこめられている。一つは日本思想史学から他の学問分野への越境である。そしてもう一つは他の学問分野から日本思想史学への越境である。いずれにしろ、開かれた日本思想史学の有り様を考えてみたい。当然に越境はあらゆる方面に渡るが、今大会は思想と文学との間に焦点を当てることにした。

そこで大会委員会は、いとも易々と思想と文学の間を往来される中野三敏氏にまず御提言を頂き、それに続いて三名の方々に主題をめぐっての報告をお願いした。

報告の一番目はツベタナ・クリステワ氏である。氏は『心づくしの日本語』（ちくま新書、二〇一二年）で「やまと言葉」（和歌）から日本の思想に鋭く切り込む。日本思想史学への「越境」どころか、日本思想史学という枠そのものを創造的に「破壊」する氏のパワーが炸裂するのではなからうか。氏の挑発的な議論を避けて通ることはできない。

二番パッターは田中康二氏である。氏には『本居宣長の東亜戦争』（ベリかん社、二〇〇九年）という刺激的な著書がある。直近では『江戸の文学史と思想史』（ベリかん社、二〇一二年）を編まれ、そこで文学研究側から思想史側への、いわゆる「果たし状」を提出されている。本会員にはこの「果たし状」を受けて立つことが要請されているよう。

最後の報告者は本会会員の荻部直氏である。氏は日本政治思想史が専門で、『光の領国——和辻哲郎』（創文社、一九九五年）、『丸山眞男——リベラリストの肖像』（岩波新書、二〇〇六年）といった著書があるが、『安部公

『房の都市』（講談社、二〇二二年）といった本も著されて文学にも造詣が深く、日本思想史学の領域から文学の領域へと果敢に越境してもらえよう。

このように役者が揃えば、この公開シンポジウムが面白くないはずはない。刺激的な知の饗宴の幕開けである。

（国際基督教大学教授）